

月刊

地域保健



- 第1特集
- 第2特集

ひきこもりの理解と支援
不育症を乗り越える



● FACE 2010

南アルプス市保健福祉部健康増進課健康企画担当 副主幹

長谷部裕子さん

● OPINION! 保健師さんへ

公益社団法人地域医療振興協会

ヘルスプロモーション研究センター長 岩室紳也さん

Face
2010

先輩からのバトンを次世代に

無医村、合併、新しい市——時代の変化を駆け抜けて

南アルプス市 保健福祉部
健康増進課 健康企画担当
副主幹

長谷部裕子さん

取材・文 編集部
photographs : Sei Kamiyasu

2003年4月、「南アルプス市」と

いう美しい名の市が誕生した。同時に

人口5000人あまりの芦安村は6町村

(八田村、白根町、芦安村、若草町、

榊形町、甲西町)の合併により128

年の歴史に幕を下ろした。当時、村最

後の保健師の一人として合併前の調整

に奔走したのが長谷部裕子さんだ。

芦安村の隣町である榊形町の出身。

1988年に「一人保健師」として村

に就職して以来15年間にわたり地域の

人に慕われつつ小さな村を守ってきた。

合併後の南アルプス市では、健康

部門のリーダー格として企画調整の仕

事に携わる。無医村の保健師が合併を

経て人口7万人の市保健師に至るまで

——その足跡は保健師の歴史半世紀分

に匹敵するほどの密度を感じさせる。

理想的な実習

長谷部さんの原点となったのが、保

健師学校時代の実習だ。

「長野県の保健師専門学校に通ってい

ましたが、6週間ほど町の役場職員に

なりきるというユニークな研修でし

た。毎朝家から、職場に出勤するの

です。実習先は野尻湖のある信濃町で

した。私は指導保健師さんの隣に座っ

て職場内のやりとりをそばで見て、訪

問、健康相談、健康教育、病院との連

絡会などにも同行させてもらいまし

た。今振り返ってみれば、その方の一

つひとつの活動は地域住民の健康レベ

ルに応じたもので、しかも単発で終わ

ることなく全体として地域の健康づく

りの底上げにつながっていたのです。

『保健師とはこういうものだ』と私に

見せてくれたのでしよう。住民と非常

に近いところにおいて信頼も厚く、いつ

も傍らで『すごいなあ』と感心しながら

見ていました」



榊形健康センターから榊形山を望む。エアーズロックのような形でまるで聖地のような

保健師学校を卒業するにあたり、郷里の山梨県での就職先を探した。だがインターネットもない時代、県外で得られる情報は限られている。電話帳を手在市町村に電話をかけまくったが色よい返事はなかった。

保健師の道を諦めかけていたとき、一本の電話がかかってきた。山梨県の

ひきこもりの理解と支援

P16 「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」について

○【インタビュー】 齊藤万比古先生（国立国際医療研究センター 国府台病院）

P24 ひきこもりケースを地域で支援するために

—精神保健福祉活動の現状と課題

○山梨県立精神保健福祉センター 近藤直司

P32 【事例】 田辺市のひきこもり支援

○田辺市保健福祉部 松本敦子

「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」を中心に

2003年以來7年ぶりに、ひきこもり支援の新しいガイドラインが出た。前回と比べ、ひきこもりをメンタルヘルスの問題としてより踏み込んだ表現をとりつつも、社会を挙げての支援の意義を強調しているのが特徴である。わが国におけるひきこもりの数は少なくとも26万人くらいとみられており、0.5%の家族がひきこもり状態の子を抱えているといわれる。長期化すれば社会復帰が極めて困難になるため、地域における適切な介入が強く求められている。

特集では、新ガイドラインの解説をはじめ、地域における支援の現状と課題、自治体の取り組み事例を紹介する。





第
2
特
集

不 育 症 を 乗 り 越 え る

女性の晩婚・晩産化、少子化の傾向が進む一方、妊娠しても、待ち望んだわが子の誕生を迎えられない不妊症。現在、年間7万9000人の患者が推計されており、全国では30万～50万人もが悩んでいるといわれる。

多くの場合、染色体異常が原因と考えられるが、専門外来に受診することで、8割が出産に結びついたとの調査結果が出ている（厚生労働省研究班まとめ）。

不妊症の実態が社会により広く認識され、保健師も日常の業務から支援の幅を広げられるよう、識者・関係者から現状と課題の要点をご紹介します。

P38 不妊症とは

◎杉ウイメンズクリニック 杉 俊隆

P44 赤ちゃんのハートビートが活動の原動力

患者の立場から不妊症克服に取り組む「ハートビートくらぶ」

◎NPO 法人不妊症友の会「ハートビートくらぶ」 松山弘美



合言葉は 気力・体力・情熱！

語学と農業を極めた保健師が
日本海の小さな島で奮闘中

やなぎさわ まさこ
柳澤昌子^{あかしまうらわ}さん ●新潟県粟島浦村 総務課保健衛生係（地域包括支援センター兼務）

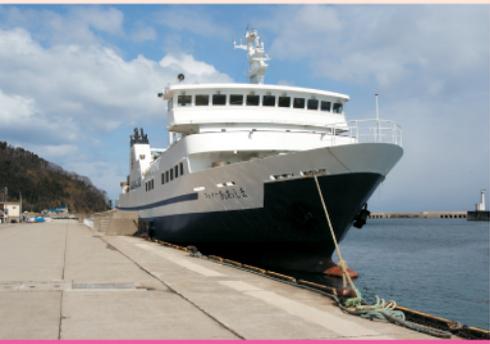


▲島の北端に近い鳥崎展望台にて。背景に見えているのは本土の朝日連峰だ



取材・文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

2メートルを超える波にぐらんぐらんと揺られながら、フェリーがあわしまへは日本海を進んでいる。なんだか気持ち悪い……。ぐったり横になり、酔いに耐えながら約1時間30分。ようやく目的地の粟島港にたどり着いた。ここは新潟県岩船郡粟島浦村。粟島という周囲約23キロの小島がそのまま一つの自治体になっていて、人口はおよそ350人。全国で4番目に小さな



▲村上市の岩船港と粟島を結ぶフェリー。他に高速船もある

自治体だ。高齢化率も新潟県内で最も高く、無医地区でもある。

港から3分も歩けば役場だ。訪ねて行くと「船、揺れたんじゃないですか？ お疲れさまでしたあー」と笑顔で迎えてくれたのが今回の主役、柳澤昌子さん。2008年4月から島唯一の保健師として奮闘している千葉県市原市出身の29歳だ。

最短コースで 看護師免許を取得

柳澤さんが保健師になったのは、いくつかの背景がある。一つ目は10歳年下の弟の出産を担当した助産師が自分をとり上げてくれた人だと知り、その仕事に興味を持ったこと。二つ目は中学2年で膝の靭帯を切断する大けがをして、体の仕組みについて興味を持ったこと。そこで高校進学にあたり「漠然と3年間を送りながら将来を考えるのではなく、何かを専攻するなどチャ

レンジをしてみたい」と考え、高校から入ることのできる看護学校、千葉県立若葉看護高等学校衛生看護科（現・県立幕張総合高等学校）に入学。「普通科と違い勉強は大変でした。でも、それ以上の楽しさもありました」

高校卒業時に得た資格は准看護師（当時）だった。次は迷うことなく、高校の隣にあった県立衛生短期大学第2看護学科（現・県立保健医療大学）に進学。もちろん正看護師の資格を取得するための目標が最終的な目標ではなかった。

「やはり助産師という仕事に憧れがあったので、短大を出たらまた進学して資格を取ろうと思っていたのです」ところが短大の実習で、ある町の保健師活動に触れると徐々に考えが変わってきた。

「実習がとてつもないもので、保健師さんに付いて訪問するなど多くの経験をしました。『病院の枠を超えて